「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿とは？」

２０２４．３．１９　大分県教育委員会

CASE 47

3歳児

私の『一番いい音』

協力園（大分市）
大分大学教育学部附属幼稚園

（これまでの経緯）

晴れの日が続き、今日は久しぶりの雨。朝の会では、担任保育者が保育室でどのような遊びをしたいか子どもたちと話し合っています。積み木やブロック、塗り絵、パズルなど、子どもたちは思い思いに口にします。しばらくして、「私は積み木がいい。」「積み木でおうちごっこ。」「オーロラ姫のおうち。」「10階建てにする！」などと、以前の遊びを思い出しながら話し始めました。

担任保育者は、子どもたちの思いを認めつつ、集めていたドングリからドングリムシが出てきたことにも触れ、子どもたちと遊びの場作りに取り掛かりました。A児は、ダンボールの積み木を3つ積み重ね、自分の背丈より高くすると「これ、どう？氷のおうち。」と、担任保育者に見せます。

A児は、氷のおうちを担任保育者に見せると、テラスのドングリを使って遊べるコーナーへ行きました。そこでは、友達がペットボトルに黙々とドングリを入れています。A児が友達の様子を見ていると、このコーナーにいる保育者は、「大きいのと小さいのと、どちらのペットボトルがいいですか。」と、声を掛けました。「小さいの。」と答えたA児は、保育者から小さいペットボトルをもらい、ドングリを入れ始めます。

あっという間に、小さいペットボトルはいっぱいになりました。「大きいのは、入らない。」と言いながら、蓋をして片付けようとします。その様子を見ていた保育者は「大きいドングリは、全部入らないのかな。」と、A児に尋ねました。

すると、A児は小さなペットボトルに入れていたドングリを全部トレイに出しました。それから、大きい方のペットボトルを持ち、もう片方の手でドングリを一掴みにし、一つずつ落とし入れます。小さいものや細長いドングリは、ペットボトルの口から指を放すだけで入れることができましたが、大きくて丸いドングリは、指に力を入れてギュッと押し込まないと入りません。何度も入れていると、大きさの感覚をつかめたのか、動作が速くなってきました。

A児は時折、ドングリを手に取るとすぐにペットボトルに入れずに指先でクルクル回しています。何かが違うと感じたのでしょうか、ドングリに開いた穴を見つめています。

A児は、その後もドングリを一掴みして、一つずつ落とし入れていましたが、ペットボトルの3分の2程貯まると、一度蓋をして振ってみています。ここから、ドングリを入れては振ってみることを始めました。

A児は、ドングリをペットボトルの口の下まで入れ、耳に近づけて振って音を聞きます。その後は、ドングリを少しずつ出しては音を聞くことを繰り返しながら、ペットボトルの半分のところまで減らしました。

その時、友達が「できた！」と、ドングリをいっぱい詰めたペットボトルを保育者に持ってきました。「どんな音かな。」と保育者が、ペットボトルを振って音を出してみます。その音を聞いたA児は「いっぱい入れると、速く鳴るよ。」と言い、ドングリが半分程入っている自分のペットボトルを振りました。保育者と友達は、A児の鳴らす音を聞いています。

その後、少しドングリを入れては、振ってみることを繰り返し、友達の持ってきたペットボトルのようにドングリをいっぱい入れました。A児は、保育者の近くに行き「ちょっとかわいい。どう？いい音？」と聞きましたが、自分の感じる『いい音』ではなかったのか、保育者の言葉を待たずにペットボトルの中のドングリを出し始めました。そして、A児は少し出しては振り、また少し出しては振って、音を聞いてみることを繰り返します。ペットボトルの半分程のところまでドングリを残し、蓋をして、再度ペットボトルを振ったところで、『これでよし』というようにうなずき、満足そうに保育室に持って入りました。

A児が保育室に戻った時、担任保育者が「いい音になったんだね。」と声を掛けました。A児は、何度もドングリの量を変えながら試したことを「音を聞いてみたから。」と誇らしげに、担任保育者に伝えました。

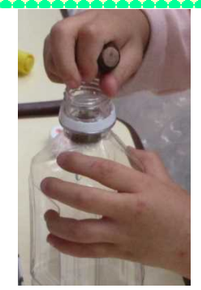
A児が最終的に「いい音」に選んだ量

保育者に「ちょっとかわいい。どう？いい音？」と、聞くA児

「いっぱい入れると、速く鳴るよ。」と言うA児

ドングリに穴が開いていることに気付くA児

大きくて丸いものは押し込む。



片手で一掴みにし、一つずつ入れる。

思考力の芽生え　数量や図形などへの関心・感覚

保育者の援助・環境構成のポイント

自分の好きな遊びを見つけ、楽しめる環境

・したい遊びができるよう、事前の話し合いの場の設定
・物の量や形、大きさを感覚的に捉えられるような素材、自分なりの思いで『こうしてみたい』が実現できるような十分な素材の量
　（大小のペットボトルや、形や大きさの違うドングリ）
・子どもが満足するまで遊び込める時間や空間の確保

子どもが自ら考えたり、それを表現したりできるような保育者の関わり

・子どもの考えを受け止め、内面を言語化し、自分の考えや友達の遊び方に気付かせる援助

事例に見られる「10の姿」の育ち

思考力の芽生え

A児は、ペットボトルにドングリを入れて振ることを何度も繰り返すことで、ドングリの量を変えると音の速さが変わることを発見した。

また、保育者が、友達のペットボトルを「どんな音かな。」と言いながら振った時に、音色の違いに気付いた。その後、自分の『いい音』を見つけたいという願いをもって、量を変えながら繰り返し試す姿が見られ、最後には自分の満足できる音を見つけた。

子どもは、関心をもったことに積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりするようになる。

事例に見られる「10の姿」の育ち

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

A児は、小さな容器はすぐにいっぱいになることや、中のドングリを全て出す体験を通して「量」に触れている。さらに、大きな容器に何個も入れていきながら、「大きさ」や「形」、「重さ」を体感していった。

さらにA児は、自分なりの『いい音』を探す時に「量」を手掛かりに試行錯誤した。

このように子どもは、数量や形に興味をもって関わり、気付いたことを遊びの中に取り入れていく。さらに、保育者や友達と一緒に数量や図形に触れて、楽しむ体験を重ねることで、興味や関心が広がっていくと考える。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

豊かな感性と表現　｜　自然との関わり　｜　自立心

思考力の芽生え　｜　**数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚**

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。